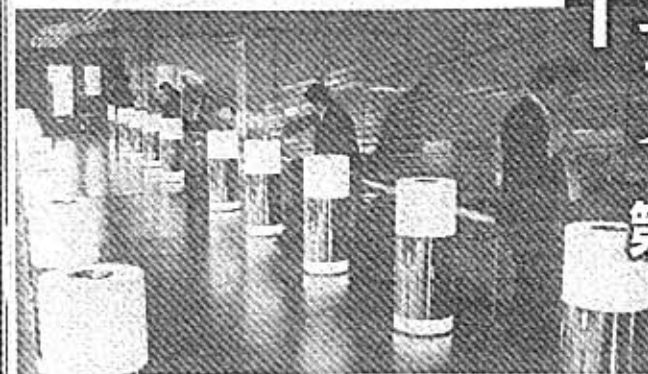


「美しい分煙社会」の作り方

第13回 空港では、すでに「快適な分煙」が実現している 須田慎一郎 (ジャーナリスト)



左上から羽田、成田、関空の喫煙スペース。いずれも広く清潔で使いやすい。



成田国際空港株式会社提供

前回(昨年12月2日号)、鉄道の駅を舞台に「喫煙者」と非喫煙者が共生できる「分煙社会」がどうすれば実現できるか、その取り組みをレポートした。サービスの

一環として喫煙スペースを設置する駅とそうでない駅とが混在し、それぞれに苦心と課題があった。ただし、ここでも「全面禁煙」が喫煙者を逃がし、一部で利用客の減少まで起きていることがわかった。

では、「空の駅」はどうなっているか。今回は「空港」である。あえて結論からいえば、多くの空港では現状の公共施設では最も手厚いといっている喫煙環境を整えており、すでに喫煙者、非喫煙者ともに不満を持たない「分煙空間」が実現している。本連載で掲げる「美しい分煙社会」の答えのひとつが見えている。

目下、厚生労働省は職場の受動喫煙防止を名目に「受動喫煙防止法」(仮称)の法制化を進めているが、鉄道駅と空港における分煙の取り組みを見比べれば、

喫煙者排除の規制だけでは問題が解決せず、しかも企業や施設に過大な負担を強いることになる現実がはっきりしている。

主要な国内線のターミナルである羽田空港は、一昨年から国際線が大幅に拡充され、名実ともに首都の玄関口になっている。

* 普乗待合室や到着ロビーをはじめターミナルビル内の各所には喫煙室が配され、たばこを吸う乗客で常に賑わっている。鉄道駅の多くで、喫煙スペースは施設の片隅や屋外に追いやられていたことは対照的に、使いやすい場所にあることはもちろん、例えばブルーを基調にほの暗い空間が演出されたスペースや、鮮やかなオレンジが目立つ空間など、多彩なラインアップで閉塞感を感じさせない快適な環境を整えている。

成田空港も分煙環境の整備に力を入れている。毎年のように喫煙スペースがリニューアルされ、大型スクリーンが配られて音楽が流

れるなかでゆったりと腰掛けて一服できるラウンジも用意されている。

最近、台頭が著しい格安航空会社(LCC)の拠点として新たな活路を見出している関西国際空港も、やはり喫煙客に配慮した施設作りがなされている。

国際線を持つこれらの空港では、特に長時間フライトの間、喫煙できない客に配慮することは当然のサービスなのだろうが、だからといって受動喫煙の被害に無関心というわけではない。

成田では10年6月から喫煙室を設置している店舗を除き、ターミナル内の飲食店を全面禁煙にする完全分煙を実施している。「非喫煙者」と喫煙者の双方のお客様に利用しやすい快適なターミナル空間をご提供してきました」(同社旅客ターミナル部)。関空も11年4月から同様の措置を講じ、「喫

競争と企業努力が生んだ環境

空港で早くから分煙環境が整備されてきた背景には、

いうまでもなく機内が全面禁煙であることが大きい。

の要請や、スペースを遮断できない事情のある飛行機で全面禁煙は当然だろう。そこに航空業界の問題があるわけではないが、鉄道との競争で苦しい戦いを強い

られていることは厳然たる事実である。日本航空の経営破綻にも、鉄道との競争は少なからず影響している。

空港の分煙環境は、そうした客の厳しい選択、業界の経営環境を背景として整えられてきた。「喫煙は悪」という政府・自治体やメディアの論議に同調している

だけでは客からさっぽを向かれてしまう業界の事情があったからこそ、喫煙客へのサービスを充実させてきたのである。一方で、非喫煙者から不満や苦情が出るような環境が許されない世

情にもまた配慮が必要だったことで、皮肉にも理想的な分煙環境ができたといえるかもしれない。

前述のように、一般企業や飲食店で、空港のような充実した設備は簡単には作れない。が、空港の例は、規制や法律で分煙化を義務

煙されないお客様と喫煙されるお客様双方のニーズに配慮することができたと考えています」(同社旅客サービスグループ)と説明する。

その他、地方空港に目を転じて、前回検証した駅のように、屋外に灰皿をボンと置くだけのような施設は皆無に等しい。例えば宮崎空港では「施設内禁煙」と看板を掲げているが、屋内にも仕切られた喫煙スペースがあり、喫煙客もストレスを感じない。

すでに多くの空港では喫煙者や非喫煙者が共生できる「美しい分煙社会」が具現化されている。それらの事例は、新たな規制を設けなくとも公共施設における分煙が可能なことを示しているといえるだろう。しかし一方で、空港のような広いスペース、大規模な設備投資は、すべての施設や企業でできるわけではない。

以前、本シリーズで池田清彦・早稲田大学国際教養学部教授が語ったように、規制で一律に縛るような多様性なき社会は衰退する。

実は、分煙化でサービス向上を図る方向性が固まっている航空業界でも、そこに至るまでに「完全禁煙」を目指した歴史もあった。

長野県が運営する「信州まつもと空港(松本空港)」では、嫌煙家として知られた田中康夫・元知事存在もあって、03年の健康増進法施行に伴い、ターミナルビル内の全面禁煙に踏み切った。同空港には新千歳空港(北海道)と福岡空港を結ぶ2路線しかないため、乗降客も少なく、喫煙者にも理解を得られるという目算があったとされる。

ところが、この新しい取り組みは多くの問題を引き起こし、ほどなく撤回されたのである。(以下次号)